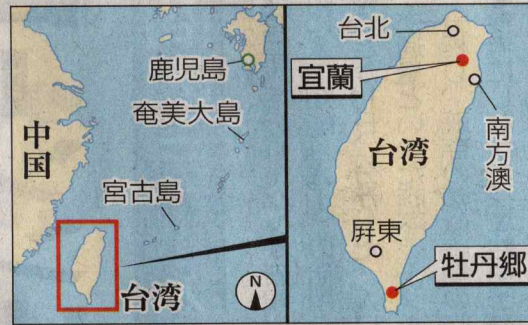


# 台湾に西郷家の足跡

明治維新150年を迎え、NHK大河ドラマ「西郷どん」の主人公でもある維新の立役者、西郷隆盛に改めて注目が集まっている。一方、台湾では隆盛の弟西郷従道と長男西郷菊次郎が近代史に足跡を残したこと

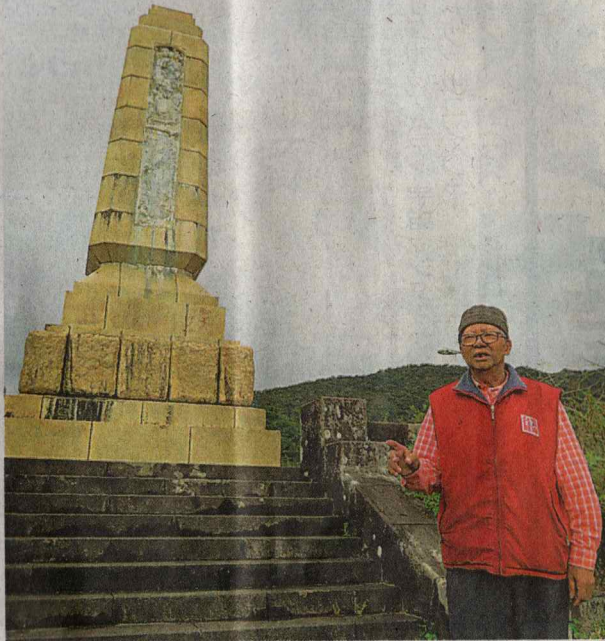
で知られる。近年、歴史を見直す機運が高まっている台湾で、西郷家の人々はどう受け止められているのか、2人にまつわる記念碑のある地を訪れた。

(小山田昌生)



台湾最南部の屏東県。車は山道に入り、先住民バイワン族が多く住む牡丹郷に差し掛かった。この辺りは明治政府初の海外派兵となった1874年の「台湾出兵(牡丹社事件)」の激戦地跡。現在は石門古戦場と呼ばれている。遠く台湾海峡を望む丘の上に、大きな石碑が建っていた。碑文は剥がされ、文字は刻まれていない。

石碑は日本統治時代の1936年、出兵を指揮した陸軍中将、西郷従道を顕彰する「西郷都督



旧「西郷都督遺跡記念碑」の前で、牡丹社事件について語る華阿財さん。石碑の碑文は取り外されていた。||屏東県・石門古戦場

## 従道の古戦場 進む再検証 台湾出兵の歴史語り継ぐ

遺跡記念碑」として建立された。だが戦後、中国から来た国民党の独裁下で、碑文は祖国復帰を意味する「澄清海宇還我山河」に付け替えられた。

2016年、台湾の主体性を重視する民主進歩党(民進党)の蔡英文政権発足を機に、史跡や



年、歴史を見直す機運が高まっている人々はどう受け止められているのか、記念碑のある地を訪れた。

(小山田昌生)

# の足跡

遺跡記念碑として建立された。だが戦後、中国から来た国民党の独裁下で、碑文は祖国復帰を意味する「澄清海宇還我山河」に付け替えられた。

2016年、台湾の主体性を重視する民主進歩党(民進党)の蔡英文政権発足を機に、史跡や

**ワードBOX**  
台湾出兵(牡丹社事件) 1871年、琉球・宮古島の年貢船が暴風雨に遭い、台湾南部に漂着。66人が上陸したが、現地のパイワン族に敵と誤解され、54人が殺害された。日本は清朝に抗議したが、清朝は台湾先住民を「化外(けがい)の民(統治の及ばない民)」として責任回避したため、74年、西郷従道率いる部隊が台湾に上陸し、パイワン族集落の牡丹社などを制圧した。日本は清朝に琉球の日本帰属を認めさせ、賠償金を得て撤兵。その後、清朝は台湾統治を強化するなど同事件は日本、台湾、中国の近代外交史の転機となった。

建造物を本来の姿に戻す「歴史現場再生」の動きが本格化。これを受け屏東県は同年10月、県文化資産審議委員会の決議を経て、「西郷碑復元への一歩」として、戦後の碑文を取り外した。

台湾出兵はそもそも1871年に琉球(沖縄)宮古島の年貢船が台湾南部に漂着し、上陸し

た54人が現地のパイワン族に殺害されたことが発端。元牡丹郷長(村長)でパイワン族の華阿財さん(79)は「集落の人々は貴重な水や芋を分け与えたのに、漂着した人たちは逃げようとした。言葉が通じず、誤解したことが悲劇を招いたのではないかと推測する。

牡丹郷の入り口の門にはパイワン族の伝統的デザインが施されていた

明治政府はその3年後、事件を口実に出兵に乗り出した。西郷従道は3600人も兵を率いて台湾南部に上陸し、海辺に陣を構えた。従道の戦略について、中央研究院民族学研究所(台北市)の黄智慧・助理研究員は「山地に暮らすパイワン族に対しては威嚇の意味が大きかった。諸外国に日本の軍勢力を誇示する目的もあったのではないかと分析する。

戦いは近代兵力を備えた日本軍が優位に進め、牡丹社の頭目(首領)父子の首は取ったが、双方の戦死者は少数だった。だが、日本兵は滞在が数カ月ぶつちにマリアナなどで十人が病死し、戦費も膨ら「そういった意味では、勝っていない戦争だった」(黄氏) 現地の人々は当時、従軍行動をどう受け止めたのか。パイワン族は文字を持たず、口伝の記録しかないため、真相が明だが、華さんはあることを覚えてくれた。「地元には『ゴ』という言葉がある。や作品が『見事だ』といいた。従道が圧倒的な力を言かけたことを、敵ながらたしかにことが伝わったんじゃないだろうか」



西郷従道(1843~1902) 鹿兒島生まれ。1869年、兵制研究のため渡欧。西南戦争では兄隆盛に加担せず、政府側にとどまった。海軍大臣、内務大臣などを歴任した。(写真は国立国会図書館ウェブサイトより)

時の政権によって、史跡への評価が変わってきた。現在、屏東県と牡丹郷など戦場一帯を「牡丹社事件現場域」として整備し、解説成も計画している。碑文については国民党支持者もあり、実現していない。華さんは「西郷碑」に戻すのが当然だと語る。「牡丹社事件の記憶。だからという日本人が建てた石碑の碑文が替えたのでは、歴史の正しさを伝えることにならない」 ライフワークとして牡丹社事件の研究に取り組み、長年取り調査なども続けてきた。2005年には沖縄と交流を深めたという。代のために史実を検証し、につなげるのが私たちの「力強く語った。」